

インターネット公開許諾のない文章には墨消し処理を施しています。

諸子は外道である

三 枝 樹 貫 道

幾度か春去り春來り、教界學界には數多の大濤小波が打ち寄せ、岸は破られ堤は築かれ、時代と共に吾が教界學界も進歩か退歩か、或は適應し或は反抗して、トニカク不
斷の變遷を續けて居る、此間曲學阿世の礫學者の轉々せる間に處して、大磐石の如く
騷がす、動かす常に一意宗祖の遺訓を奉じ、時代の流れを超越して、専ら宗乘の蘊奥を
極められしは故恩師勤息上人であつた、昨冬宿痼變じ有爲の身を捨て無爲の淨土に
往詣せられてより、學界轉々寂寞を感じ、教界爲に不振の狀態となつた、今茲に門下同
志、上人の追憶思慕措く能はず、永く其徳を傳へん爲め上人追悼號を上梓せらるゝに

當り、予も亦門下の一人として上人の學を思ひ、徳を慕ひ、逸話の一二を記憶を辿りて上人の面影を偲ばうと思ふ。

師が曾て宗大の前身、淨土宗本校に教鞭を取られし時であつた、一日宗乘の試験に際し、例の如くチヨコ々々走りに教室に入り、彼の大きな鼻をかみ、點檢の後、今日は宗乘の檢査をしますとて、一枚の紙を袖より出し、黑板に向ひ、白墨を以て書き下された問題は

西方淨土の阿彌陀如來は東西南北何れの方角に向つて説法し給ふや、

一同餘り突飛な問題に呆然として、無言の驚異に襲はれ、試檢に於ける貴重なる時間、の経過をも忘れ、只だ徒らに黑板を凝視するのみであつた、師は學生の此の亞然たる状態、狼狽せる胸中をも、恰も吾不關焉たる態度であつた、盡十方無碍、光如來の光明に浴し、彌陀大悲の御手に抱かれて育まれし上人に取りては、火視的明了なる此の事實も、當時の學生たる予輩等に取りては、模糊として疑問の種である、殊に意表に出られし此問題には、皆一同拱手、思索、苦慮せざるを得なかつたのである、此の事を見ても上人が未徒たる學生の信仰に注意せられし、慈心の程を難有喜ばしく感ずる次第である、

又京都専門學院の教職にあらせられし時、在京の有志が知恩院山内良心院で宗義研究會(?)を開いた事があつた、其席上偶々話題は、淨土宗布教宣傳の方法に移り、大に義論に花咲き、其結果、教義も時代に適應して解釋すべし、時代に生きんとするものは、須く時代を考へ、教義の解釋も時代に適應せしめて始めて有意義なりとの論者多數を占めたり、師は此れに對し大に不贊成を唱へられ、苟も身淨土宗にあり、宗祖の流を汲む者殊に宗門の扶助を受けて學問せし者、此最勝微妙の法をいかでか五濁の此世に適應せしむべき、宗門は此の如き言を弄する者を養成せざるなり、諸子は宜しく宗門より破門すべきである、諸子は外道である、外道の輩と席を同うするは汚らはしとて、忽ち席を立ち如何に止むることも聽き容れられず、其儘歸寺せられた事があつた、師の宗義に對する信念の厚かりし事、宗乘の權威として終始せられし此面目、此一事にても躍如として現はれてをる、(大正一一、一、四)